

わたしは賭けた

——山口先生との思い出——

暉 峻 康 隆

わたしは昭和五年に国文科を卒業し、昭和七年十月八日に山口剛先生は亡くなられたのだから、晩年の弟子である。晩年といっても、先生の亡くなられたのは数え年で四十九歳だから、ずいぶん若死であった。第一高等学院三年を修了して、昭和二年に大学の国文科に進んだ時、先生は文学部教授となられてから二年目、近世文学者として、もっとも充実した時期に際会したわけである。

しかし大学へ進んだ当時の早稲田の文科といえば、尾崎一雄、井伏鱒二、丹羽文雄、火野葦平、浅見淵、寺崎浩といった連中が一二年上にゴロゴロしていたし、同期には石川達三や新庄嘉章などが、いずれも一っぱしの顔をしてとごろを巻いていたので、わたしも仲間とともに同人雑誌を持ち、まるっ切りの文学青年であった。

ところが国文科で先生の江戸文学の講義をきいているうちに、すっかりトリコになってしまい、せつせと西鶴や洒落本や黄表紙や人情本を読みふけるようになった。角刈り頭で目鼻立ちが大きく、いつも渋い和服に袴のさっそうたる男性的な講義姿もさるこ

とながら、長年江戸文学を読みこなした上での含蓄のある講義はまったく魅力的であった。

昭和五年に卒論は洒落本を書いて、まあまあという成績で卒業したのはいいが、五十人に近いクラスメートの中で、職があったのは一人という状態だったので、大学院に残ってもうすこし勉強しておこうと思い、国の両親に相談したら、学資半減でよければという条件で、とりあえず入学金だけ送ってきた。そこで心祝いにおみやげをさそって呑みはじめたところ、二晩で呑んでしまった。もともと作家志望だったので、進学はあっさりあきらめて、卒論の口頭試問の際、シカジカかくかくと正直に打明け話をしたところが、豊阿弥・豊不言と号して耳の遠い先生は、片手を耳にあてながら笑っておられたが、

——なあに君、やる気があれば大学院なんか行っても行かなくてもおんなじこった。内へ時々きて、おれんところの本でもしばらく読んでおれよ。

といわれたので、そのままズルズルと通い弟子みたいなかっこうになって先生の仕事のお手伝いをしながら、江戸文学を読みふけ

る身の上となった。

ところが何しろ減額された学資では、満足に飲み食いもできないので、背に腹はかえられず、純文学をうっちゃって大衆小説で稼ぎはじめた。味をしめて当時駿南社から出ていた大衆雑誌「漫談」に、毎月四五十枚の時代小説を匿名で書いているうちに、「侍巾着切り」という侍ヤクザ物が、当時売り出しの月形竜之介主演で映画になってしまった。

封切りしてから二三日たって、牛込弁天町の先生のお宅にうかがったら、晩飯時になると、例によってわたしのためにお銚子が一本ついている。いつも手酌でいただくのに、その晩にかぎって先生が手ずからお酌して下さって、

——君あの映画見たよ。なあ、おもしろかったなあ。と奥さんの方を見ながら、

編集者附記

暉峻教授はもっぱら山口先生との思い出を語られた。今年三十三回忌という歳月のせいであろうが、若い学生諸君のために、先生のアウトラインを記しておくことは必要であろう。

明治十八年土浦市に生れ、明治三十八年早稲田大学高等師範部卒業、大正元年早稲田大学講師、大正九年早稲田高等学院教授、大正十三年同高等師範部教授、文学部教授。江戸文学一般、支那文学を講義された。昭和七年死去、四十九歳。趣味的、好事的な人

——ところで映画になるほどなら、その道でやっていけるだろう。おれはその方のめんどろうは見てもやれないから、だれかしっかりした先生を世話してやろう。今晚は君の新しい門出のお祝いだ。

といってまた銚子を取上げられたのには、心の底から参ってしまった。

純文学も時代小説もあったものではない。これで心機一転してわたしはそれに賭けることができた。来月は先生の故郷土浦の菩提寺で、三十三回忌を営む予定である。先生よりも七年も生きのびていながら、学問的にも人間的にもこのていたらく、恥かしい次第だ。

功ならず名ばかりとげて年の暮

平賀源内自嘲の句が身にしみる昨今である。

々の対象であった江戸文学を学問として研究され、それにふさわしい成果を示された最初の人といっても、必ずしも過言ではない。「江戸文学と都市生活」(大正十三年)・「断碑断章」(昭和五年)・「西鶴・成美・一茶」(昭和六年)・「紙魚文学」(昭和七年)・「日本名著全集江戸文芸之部」(大正十五年より)解説・「江戸文学研究」(昭和八年)などの先生の著書・論文は、国文学科学生である以上、ぜひ在学中に一読してもらいたい。先生がいかに偉大な学者だったかが理解されるはずである。